

隨

筆

焚火

井 口 鐵 介

西行は熊野路を歩いていた。日が傾き、とある山村の宿に泊まることになった。日が沈むと急に寒くなり、宿の主人が柴を焚きはじめた。炉端を囲んでいた客たちは壁に凭れて眠りに就こうとしていた。火を焚き続けている主人に西行が声をかけた。「ご亭主、拙僧が代わろう。火の世話は順番にやればよい」と。しかし、主人は他人にはまかせず相変わらず火の世話を続け、やがて夜が明けた。

西行は熊野で用事を済ませた帰りに、またこの宿の世話になろうと思つた。近くまで来てみると宿の前の人だかりがしていた。「主人は亡くなりました。ここには泊まれません」と村人が教えてくれた。

西行は寝ずに柴を焚いてくれた主人を哀れに思い歌を詠んだ。

宿の主や野辺のけぶりに成にける
柴たく事を好み好みて

「一晩中火を焚いてくれた宿の主人は亡くなり、野辺送りの煙になつてしまつた。柴を焚くことが好きで好きで仕方がないという、そんな人であつたよ」。歌はこのような意味であろう。

西行は二三歳で出家し、鞍馬や吉野や高野の山奥に庵を結び、覓の水も凍てつくような寒さの中で修行を重ねた。伊勢や讃岐や陸奥での厳しい旅枕にも耐えてきた。長く修行を続けてきた西行は火の焚き方をよく知つていたに違いない。宿の主人も長年の経験で、暖かく火を焚く術を得ていた。そして、そういう主人を西行は好もしく思つていたのだ。

西行は「歳月人を待たず、無常迅速である」という事をあらためて噛みしめていた。この歌は『松屋本・山家集』(『西行全歌集』・岩波文庫)にあり、左のような歌が続く。

野辺の露 草の葉ごとにすがれるは
世にある人の命なりけり

「野辺の露は草の葉にすがるようにしているが、朝日が射せばたちまち消えてしまう。世の人々の命もこの露と同じように、はかないものである」とある。

西行は花と月の歌を多く詠んだ。その中でも次の歌はよく知られている。

願はくは花の下はなしたにて春死はるしづなん

そのきさらぎの望月の頃もちづき

「願えることなら、花の下で死を迎えていたい。春二月、

満開の桜のすき間から満月の澄んだ光が洩れてくる、その頃に」。

西行は七三歳の春、二月一六日に河内かわちの弘川寺ひろかわざるでその生涯を終えた。この日は釈尊入滅の日、涅槃会の翌日であつた。知らせを受けて藤原俊成・定家父子や慈円など都の友人たちは甚く感動した。若い頃から敷島の道を共に歩んだ俊成は、後にこう詠んでいる。

願いおきし花の下はなしたにてをはりけり

蓮の上はなもたがはざるらん

「西行上人は願いの通り花の下にて泰然と往生なされた。極楽浄土の蓮の上に居られるのは間違いないことであろう」。

妻の怪我

市川光治

私が駐車場で自転車のパンク修理をしていた時、突然妻が、左手の手首の上を右手で押さえながら、「木から落ちて、骨折した、出血しているから救急車を呼んでくれ」と険しい形相で言つてきた。妻は血小板が常人の十分の一しかなく、血液が固まりにくいのである。骨折と同時にそちらも心配であつた。すぐ119番すると、十分ほどで救急車がやつてきた。

「どの木から落ちたのか」と詰問された。私は庭に案内して、タイサンボクを指し、「たぶんあれだと思う」といつた。

妻はすぐに担架に乗せられ、救急車に運び込まれた。私も同乗した。

まづかかりつけの医者はどこかと訊かれた。最近医者にはいっていないので、咄嗟には思いつかなかつたが「徳洲会」と女房が言つた。そういえば二

年近く前に肺炎で徳洲会にかかつたことがあった。
「辻堂駅前ですね」と隊員がいい、「わかりました」といった。

救急車の中で隊員は妻にいろいろなことを聞いた。どこで落ちたのか。いつ落ちたのか。頭は打たなかつたか。他に痛いところはないか。保険証は持ってきたか。などである。

妻はそれらの質問に答えた後、自分は骨髓異形性症候群で血が固まりにくないと告げた。私は保険証を見せた。隊員は内容を確認して返してくれた。十分ほどで病院に着いた。すぐに連れ合いは治療室に運び込まれた。私は待合室に行くよう言われた。

私が待合室に入ったのは、午後一時すぎであった。

そこで私が待っていると、待合室の奥が救急患者の受け入れ窓口になっていた。つまり、自分で歩いてくる救急患者もいるのである。そこは救急手当を受けた後、支払いや薬の受け取りをする人の、待機場所でもあつたのである。畠仕事をしているとき、何かに躊躇して、顔面を殴打した、と話している五〇ぐらいの小太りの女性がいた。付き添つているのは女性と同年配の男性である。

立ち眩みで倒れたが異常はなかつた、とかいう声も聞こえた。

二時間近く待つて、左手の上腕部を包帯で巻いた妻が出てきた。それから薬をもらい支払いを済ませた。家まではバスに乗つて帰つた。それが十二月三日の金曜日のことであつた。

妻は、月曜日にもう一度、徳洲会病院に行つた。そこで、次からは近所の病院に行つてもよい、と言われた。妻はそのあと、慶育会病院に行った。周回バスが近くを通るので、便利ということであつた。運のいいこともあるのだ、と私は思った。その後の経過は順調であつた。

老いの眩き

梅澤輝也

五月に入つて間もなくだつた、運転免許更新に必要な認知機能検査の葉書を受取つた。昨今、高齢者の交通事故はマスコミをにぎわし、免許返上を勧め

る世の中だが、葉書に注記された「直ぐに予約をして下さい」の文字に誘われて認知機能検査だけでもと思い、湘南台自動車学校に電話した。親切な声で「一番早いのは七月七日、それに続く高齢者講習の最も早いのは七月十一日」と案内され、その場で予約した。やがてその日がきて認知機能検査、講習も滞りなく済み、あとは十月の私の誕生日前後一か月の間に更新手続きをすればよいことになった。

顧みると、一九六〇年の経済白書が「もはや戦後ではない」と記した翌年、私はニューヨークに長期出張し、アメリカの生活文化、とりわけ車社会の強烈な印象をうけて帰国した。帰国後は、せつせと毎日仕事の日々だったが車への望みは募り、朝の通勤電車のなかで学科を、実技は週末に近くの教習所で車に触れて学び、大阪・門真の試験場で受験、運転免許を取得した。今から五十八年前、一九六四年のことだつた。

免許を取得すると車の夢に駆られる。その頃、

自動車ローン制度はまだ未整備、でも何とか銀行から借り入れもして、トヨタが売り出した”初の国民車”パブリカ、空冷水平対向2気筒700ccを購入

した。ここから私の”車のある生活”が始まった。パブリカ・コロナ・ブルーバード・スバル・アコード・シビック・ファイットと乗り継ぎ、それぞれ、いろいろと多くの思い出ある生活が今日まで続いている。いま愛用しているアクアブルーのファイットも、

十月に車検がかかる。そろそろ車離れの潮時かと思っているが、さて”車の無い生活”を想定してみると、坂道が多い住居環境、バス停までの徒歩移動等の与件のなかで、先ず支障をきたすのが老妻の市民病院通り、私達二人のあちこちの医者通り、そして生活必需品や生鮮食品の買い出し、銀行・郵便局・公民館などへの”足”。荷物を持って移動するには体力的に限界を感じる。タクシーの利用も金銭的に無制限とはいかない。最近は宅配サービスもいろいろあるが、具体的にその気になつて検討してみると難点もある。せめてもの私の手慰み、ウクレレ演奏に必要なアンプの運搬を考えると気鬱になつてくる。

こんな、些細なことと云われるかもしれないが、長年定着した生活様式の転換に、私の戸惑いが頭の中を行き交う。介護保険の要支援や要介護の認定も

まだ戴いていない。

この歳、その時になつてみないと、分からぬことがある。出来るだけ自助努力を心がけ、今日も一生懸命、気張つて老いの日々を生きることを考えよう。

終り

いた。

魅惑の頑固商店街

大沼なるみ

「今日の晩御飯は、カツオの刺身にコロッケよ」と、母は仕事帰りに立ち寄った「魚つる」の刺身と、「ハマケイ」のコロッケを、テーブルの上にざくざくと出していく。

私は炊いたごはんをお茶碗に盛りつけ、みそ汁を温め、夕ご飯を整えていく。

母は刺身をまな板にのせ、どんどんどんどんスピークリーに切っていく。カツオは、大きめの二節だったので、たっぷりの分量。大皿に盛り付けて

えつ、なんと、開業したときは、屋上に、「観覧車」もあつたそう。

50周年記念企画では、藤沢で30年ぶりとなつたビアガーデンが、その屋上で開かれた。

大学生だつた頃、好んでよく通つた店がある。名店ビルの4階にある和雑貨の「紙子屋」だ。竹や木で作られた小物や、和紙でできた小ひきだしなど。和ティストのものが所狭しと並んでいた。

「えーと、たしか7階」

エレベーターに乗り込み7のボタンを押した。7階に着き降りると、管理人室があつた。すぐ先の通路には、関係者以外、立入禁止の札。「あつ行き止まりだ！ 絵画教室のホールはどこなの？」そこへ通りかかった、職員らしき人に、「7階の貸しホールはどこにあるのですか」とたず

今は、昭和レトロ感が漂う「フジサワ名店ビル」だ。1965年に創業の商業ビル。現在、34店が出店している。創業当時からあるのは、魚つる、うなぎ屋、有隣堂だ。

ねた。

「エレベーターで一度5階まで下りて、向こうのエレベーターに乗り換えて」と。

そうか、名店ビルと隣り合わせのダイアモンドビルは、各フロア毎につながっている。だけど、7階はつながっていないことか！

魅惑の頑固商店街には、まだまだ秘密がありそうだ。

普でおしゃべりに余念のない若いお母さんたちの所に戻り、スカートに触つて安心すると再びかけ出してゆく。幼児が走り回るのは、早く大きくなりたい欲求のあらわれだそうだが、その動きの敏速さにはおどろくばかりだ。

犬連れの散歩者

香 霜 小太郎

酷暑の夏が過ぎ初秋のさわやかな季節になつた。抜けるような青空と涼しい風の下、朝夕は絶好の散歩シーズンだ。ぼくのような高齢者は運動といつても散歩くらいしかできないし、またすぐ疲れるのでいつも公園のベンチに座ることとしている。

二、三才の幼児たちが無心に走り回つてゐるのを眺めるのはたのしい。時々思い出したように、ゲルー

犬連れで散歩している人もかなりいる。大小、白黒、ブチと犬の形も色も千差万別だ。種類もいろいろだが犬を飼つたことのないぼくにはよくわからない。一人で何匹も連れているのは、本人は満足しているようだが傍からみると世話がたいへんだと思う。また、乳母車に老犬を乗せて押している人は、おそらく長い間家族同様につきあつてきた結果だろうと同情する。

犬連れのいろんな風景をいつもみているうちに、ぼくは面白い傾向(?)を発見した。犬の権利つまり犬権重視派と、そうでもないつまり人権重視派の二つが犬連れにはあるようだ。たとえば、大の男が可愛い小犬を連れて散歩しているが、小犬は道草を喰つてあちこちに止まりなかなか前に進まない。しかし大の男は小犬の気のすむまで、ひもを引張ることなく辛抱強く待つてゐるのだ。他方、たとえば

妙齢の女性がいかつい大きな犬を連れて散歩しているが、犬が道草を喰おうとしてもひもを強引に引張つて自分のペースで歩いている。また犬も不思議におとなしく美人についてきてはいるのだ。こういう犬と人との関係を犬連れの散歩者にみるのがまたいちだんと興味深い。

犬を飼う人は猫を飼う人よりも総じて健康的だという新聞記事を読んだことがあるが、犬を毎日かならず散歩させることで自分も健康になるのだろう。ただ、散歩時の排尿排便の世話から予防注射などたいへんな労力、気力を要するので、高齢になつてから飼いはじめるのは難しい。

最近、高齢者でAIの犬を飼う人がちらほらいると聞いた。AIの技術もすばらしく進歩していく、たとえば頭をなでるのを忘れるとするねるし、なでてやると機嫌を直すという。生身の犬には及ぶべくもないが、それでも高齢者の特にひとり者にとっては慰めになるのだろう。老夫婦二人、多少の関心を抱いてはいる。

洗脳

加藤寿子

しかし、その頃大学一年生だった私は洗脳という言葉を知らなかつた。同じクラスで席が隣になつたかよ子さんと一緒に位会わなかつたら、別人のようになつていた。素直な長い黒髪が短くなり、茶色いベレー帽を被り、表情は輝きを失つていた。「今迄やつてきた事がサタンに導びかれていたって事が分つたの。淫行を私はしたのよ」

彼女は、下宿して大学へ通つていて、隣の部屋に住んでいる男子予備校生とデートを重ねていた。途中まで一緒に学校から帰つてきた私と別れ、弾んだ足取りで彼と並んで歩いて行くのを何度も見送つた。彼は東大を目指して、私たちが在籍する大学の学生よりもずっと優秀なのだそうで、料理を一緒に作つたりして楽しい下宿生活を送つていた。

男人の人つて、深い関係になつたら、もつと女人の人

を大事にしてくれるに違いない、と彼女は、嬉しそうに繰り返した。しかし、彼には二歳位年上の好きな人がいて、その人の結婚の知らせに意気消沈し、慰めても君ではダメだと拒まれたのだそうだ。衝撃が大きく、その晩は玉川のほとりで一晩中泣き明かしたそうだ。

男性の傲慢さは、女性の人格を無視することもあるだろうし、身勝手な甘えで困惑させられることもあるだろう。私たちはまだまだ若過ぎた。失望の中合宿に上級生の女性から誘われた彼女は、真中に線を引いたノートを見せてくれた。「このように、歴史上の全ての出来事は、神とサタンの靈によって支配されてきたのよ」と言つた。講義の途中に退座した人は、「今サタンに導びかれた邪悪な人が神から切り捨てられた」と講師が言い、会場がどよめきに包まれたのだそうだ。

さらに彼女は熱心に続けた。「三千円の合宿費用は出すから、二泊三日の合宿に参加して欲しい。私の最後のお願いです。この世の真実を学ぶチャンスがあなたに到来したのよ」

しかし、私は神様にお参りしたこともなく、気が

進まず、応じることができなかつた。彼女は気が付いたら学校にも来なくなつたし、クラスの人尋ねても、存在さえ忘れられていた。

今年の夏、安倍元首相の銃撃事件があり、関連した団体について報道していた。それで洗脳という言葉を知つた。見えるはずのない聖人の靈が見えたり、選ばれた人としての使命感に燃えたのか。今元氣で生きているのだろうか。

目に見えるはずのない靈が見えるのは脳の異常とされる。洗脳を解くには時間もかかり、大変難かしいのだそうだ。淫行という言葉にまつわる罪悪感を植えつけられ、苦しみを味わう。いつまでも納得できない思い出として心の中に残つてしまふだろう。

甥っ子との別れ

小 池 貴瓊子

忘れもしないあれは確か昭和四十四年の夏の夜だつた。川も近くにないので当時庭に小さな池があ

り、金魚を泳がせていた。庭に立つていたら、ピカツと光る物があり、それが蛍である事に気づいた。そして蛍の生れ変りのように小さな命がこの世に誕生した。子供の頃体の弱かつた妹が母となつた。私は喜びというより、アツという不思議さもあつた。初めて生れたばかりの赤ちゃんを見て多勢の中で「どの子かな?」と思つたら、父親である義弟が「あの子がうちの子」と指さしてその時身内のひいき目で一番きれいで可愛い赤ん坊に見えてホッとした。整つた顔立ちで赤ちゃんにしては色白の普通の優しい顔をしていてよかつた。その後妹は育児に追われ姿を見せなかつたが、生後半年過ぎて可愛い盛りの我が子を抱いて見せに来た。その時何という可愛さかと我が子でないのにいとおしくて堪まなかつた。妹は仲々いい子に恵まれて羨ましい位だつた。すくすくと成長して四才となり、幼稚園に通うようになり、初めての運動会を観に行つて可愛い甥っ子が列の先頭で堂々と両手を振り、行進している姿を見た時、思わず目頭が熱くなり涙が溢れる程の感動に浸つた事憶えている。祖父母や両親に大切に守られて彼はどんど大きくなり、小学校

時代は成績も良く先生にも可愛がられて、友達にも人気ありずっとクラスの級長をつとめるようになり、まわりは将来を嘱望して期待をかけて來た。身内の欲目で他人様から見たら、欠点だらけの所もあつたと思うがとに角私の目には、仲々優しくて思いやりの心もあつて、端正な容姿で素敵な少年に見えた。一寸自慢の甥っ子で、よくお使いに連れ歩いたり、遊びに行つたり、赤ちゃんの時はおんぶだっこ、ベビーカーと、まるで母親代わりのように子守をして懐いてくれて、それはくく私的人生の中で一番楽しく幸せな日々であつた。その彼も中学生となり、私から遠去かつて行つた大人になつてゆくのだつた。寂しいけどそれも成長の証と思い観念した。とも角立派な大人になり普通の暮らしをして欲しく希つた。所が神様は何をお怒りか?あの素直で優しい少年をすつかり別人のように変えて了われた。幼少時の可愛いあの子はすつかり消えて了い私の手の届かない世界へと旅立つて了つた。色々あり若くしてその父は亡くなり、その後も彼の体調は思わしくなく妹はとつても辛く苦しい日々を送つた。そして幼少時より愛してやまなかつた彼は淋しく僅

か50年の歳月を生きぬき、天国へと召されて了つた。自分が傘寿となりこんな逆縁を迎える日が来ようとは夢ですら想像だにしなかつたのに……。

今も虚しく喪失感が消えず、彼がなぜ？ あのように成人して、そして早すぎる死を迎えて了つたのか？ どうしても／＼謎でわからない。神様の思召しと諦めて、体が丈夫でなかつた所のあつたあの子にとり、母親を残して先に逝つた事。むしろあとに残り苦しむよりよかつたのか？ と思うきりない此の頃だ。あなたは一体何の為にこの世に生を享けて来たの？ 何の為に生きてそして老いた母や家族を残して逝つてしまつたの？

わからぬ。／＼。今は何もわからない。

「卒寿の人に接して」

榊 原 百合子

十月半ばのお昼に、姉の高校時代の家庭教師の先生の奥様より、「ご姉妹にお昼のお食事を差しあげ

たい」とのおまねきで伺がつたのであつた。私は遠慮するつもりだつたが、卒寿の方のおもてなしに興味をもつて、ついていつた次第であつた。奥様は、車屋のお弁当を机の上に並べて、まつてらした。茶わんむし、おしいものは、私がやりますと手をあげて、お台所に入り、用意した。姉は、お茶にうるさいので、おいしく煎茶を入れていた。

奥まつた片瀬の木立の多い住宅は、時折、鳥の鳴き声して静寂の感である。席について、「本日はおまねきありがとうございます」と姉が話し、次いで私も「おさそいくださり、うれしく思います」と、加えた。姉は、すぐ、四年前に帰天された先生の仏壇に、おまいりをして、虎屋の羊かんや、ゴディバのチョコレートなどをそなえていた。姉は何やら、しばらく仏壇の先生と話しをしていた。奥様は、その様子をじつと見つめていた。私も、姉が仏壇から離れた後、一本のお線香をあげた。

先生と奥様そして、姉、長い路を超えて、学問の世界で通じていたのだった。姉は、近代史、現代史の歴史が大好きな人であったので、高校時代の三年間、週一回、先生のお宅へ、湘南白百合学園の校舎

から、当時片瀬の駅より五分のところより、先生のお宅の密蔵寺附近まで二〇分位かけて通っていたのである。先生と姉は、先生が帰天なされるまで、その関係は続き、学問への熱情は変わらなかつたのだ。姉の近代史、現代史は、聞かされるたびに、私も年を増すごとに共感をうけた。歴史学は、観察や分類や概念や物の見方も人間が生きていく事に役立つと私は学んでいる。長年の、先生と奥様と姉の関係をみてみると、「お互の心がわかつてゐるんだ」と理解する。だからこそ、卒寿の奥様が「お昼のお食事を差しあげたい」と言われるのだと思う。

奥様は、卒寿という年令ではあるが、日常に、先生のそばにいらして、生きるために、体を使って動き、人に役に立ち、またその中から、学びそれを自分に役立たせるという、応用が出来てきたのだと私は思つた。

先日、姉と私が会を催したが、積極的に、参加して下さつた。色々な事に興味をもつて、身体を動かし、経験する事を忘れない考え方には、私はびっくりする。私も、奥様の卒寿の年令まで、人をまねく事が出来るだろうかと考えた。長い年月につちかわれ

た人間は、感じる力が身についているはずだと思うのだが、では、私はどうだらうか？先生は、湘南高校の日本史の教師、それから他校の校長、藤沢市の教育長だった人である。先生、奥様、姉は七〇年間、変わる事なく、共感と感覚と熱情があつたのだろう。きっと、これからも続くだろう。そして、私は、卒寿の奥様へ、少しでも近づきたいと思つた。

田んぼの香しい匂い

自 然

引地川親水公園は、都市公園ではあるが、農家が点在し、裏山には果樹林、竹やぶ、雑木林、古い神社やお寺、古道には庚申塔など、そして周囲には広大な田んぼが広がる里山公園でもある。公園を歩く人たちは、田んぼで繰り広げられる農作業を見ることができる。

私は毎朝5時から一時間半、歩いたり、体操したり、お喋りをしたりしながら、このあたりの季節の

移り変わりを楽しんでいる。

「4月になると、田んぼのまわりが急に忙しくなる。「代掻き」が始まるのだ。トラクターが入り、切り株の残った田んぼの土が掘り起こされる。上流の堰から水が引かれてくる。一面に水を張った田んぼに田植え機が入り、数条ごとに植えられてゆく。この頃の田んぼは光り輝いて美しい、かき回された水と土の匂いがする。

「田植え」から1ヶ月もすると、しつかり根付いた稻は「分蘖」する。稻が株分れし、1株が20本くらいになつてゆく、やがて「中干し」、成長してきた稻の根腐れを防ぎ、しつかりした株に仕立て行く大切な過程である。伸びた稻はやがて小さな白い花をつける。ツバメが上空を飛び交い、渡つて来る風にかすかに稻の花の匂いがする。

田植えから5ヶ月もすると、青い稻の穂が色づき始め、やがて黄金色に染まる。田んぼを潤してきた側溝の水が抜かれ、あちこちの田んぼには案山子が立たれ、鳥よけネットやテープが張られる。そしていよいよ「稻刈り」だ。コンバインが入り、刈り

取つた稻を「脱穀」し稻束を田んぼに並べて行く。稻刈りの終わつた田んぼは切り株の匂いがする。

そう、田んぼは季節に沿つて匂いを変えるのだ。いずれも香しく懐かしい匂いだ。私はこの匂いの変化に気づいて嬉しくなり、あらためて感動する。私たちは長い年月をかけて米作りに精を出しているうち、この水田の香りをしつかりと身につけて、生活の匂いとして来たのだと。

11月のある日曜の午後、もうほとんどの田んぼは稻刈りが終わつていたが、一枚の田んぼだけ、刈り取られた稻が「稻架掛け」にされ残つていたのだ。そこに15人くらい、若者から老人までが昔のスタイルでの農作業をやつていた。足踏み脱穀機が唸り、糲が唐箕によつてえり分けられている。それそれが楽しそうに、手作りの農作業を楽しんでいる。そこには糲と藁の強烈な匂いが漂つていた。「米作りの好きな者の集まりです」若者が説明してくれた。高齢化と省力化により農作業は変化している、それはやむを得ないことではあるが、こんな風景は永久にとつておくべきだと思つた。

1年間、田んぼには充分に楽しめてもらつた、

しばしの間、ゆっくり休んで、また来年おだやかな実りと香しい匂いを立てて欲しいものである。

一つの petit

瀧 谷 恵 子

ここ最近で、我が家にやつて来た二つの petit を紹介したいと思います。偶然 petit が揃いびつくりするやら、一人でにんまりしました。

一つ目の petit は、陶芸窯の petit です。前の窯は七宝用で、二十年以上前に自宅で楽しめたために買いました。七宝焼きを卒業し、上絵付用に使用していました。

七宝焼きは釉薬が溶ければ出来上がりですが、上絵付は簡単に焼けないので必要な温度に上げて使いました。

新しい窯が我が家にやつて来て、初めて焼いた時は、ドキドキしながら 温度表示と睨めっこしました。試運転の後に、何度も焼いた今でもあの時の高

揚感を忘れません。初めは、何度も焼成中に窯の温度を覗いていました。マイコン制御の為、正確に上絵付コースをセットし、スタートボタンを押せば、焼き上がりまで手間がかかりません。正確には、一度湿気抜きの為に外していた栓をします。手間は、それだけです。

仕上りの艶の美しさに感動しました。今は上絵に金彩を入れて、焼くことに挑戦しています。設定温度を下げて金彩を綺麗に発色させます。上絵を描くお皿も焼いてみたいとか色々な使い道を考えるとい切って買ってよかったです。

二つの petit は、「LE petit prince」星の王子さまの本です。都内の書店で、仏語版を探し出しました。洋書の売り場にありましたが、初心者なので対訳版を買い求めました。

独学で隙間時間に始めてもうすぐ一年近くになります。テレビの旅するためのフランス語に沿って、今はアプリで勉強したり、やつと参考書を手に入れたり、友人がフランス語の辞書を送ってくれたりしました。発音が難しいし、文法にも行き詰ると参考書を読み、インスタグラムにも助けられています。

学生時代の勉強とは違いますが、夢があります。こちらのpetitは、まだページを開いたばかりですが、やはりワクワクしています。音声付きなので聞きながら読みたいです。

二つのpetitは、全然違つたものですが我が家にほぼ同時期に、お迎えしました。

前者のpetitは、コロナ禍に描き始めた九谷焼赤絵細描や五彩を更に深めることができると期待しています。また、素地も作つてみたいと思います。後者は、初心者ですが、いつか現地で実地に使つてみたいと思います。

八ヶ岳徘徊

竜田孝則

三十年以上前の年末だった。上司二人を冬山へ連れていく羽目に陥つた。

目的地はA岳鉱泉だ。

登山口で念のため、服装チエックをした。スキー

旅行風のT山部長はまだしも、K井課長はペラペラのウインドブレーカーにフツーのズボン。足元はゴム長にタオルのほつかむりでキメていた。「死にますよ」。「冗談じゃない。オレはこれで、冬の伊豆に行つて猟をするんだぞ」と、K井課長。

たしかに伊豆も山だ。そして深い。が、寒さのケタが違う。まつ毛が凍つて、鼻水がツララになるんですぞ。ここでは。

まつ毛を凍らせ、鼻にツララをぶら下げた一人の「まだか、まだ着かないのか」攻撃を百回ほどいなした頃、A岳鉱泉に辿り着いた。

鉱泉は雪の下だ。雪の斜面を二米ほど下つていくのだが、ステップは外傾しており、下るのは相当難しい。

「部長、三脚を持ちますよ。危ないです」「こんなところで滑るバカがどこにいる」

一步踏み出したとたんにT山部長は最下段まで滑り落ち、その勢いで玄関まで滑走していった。ほら、いたでしょ、バカが。

玄関近くのホールで食事中だった女性グループが、目を丸くして見ていた。その中の一人が、

口にはおばつたスパゲティを噴き出し、さらに鼻の穴からもぶら下げていた。

「あいつ、おれのことを笑いやがった。鼻からもスパゲッチ・トマトをぶら下げやがって」

「おい、これのどこが鉱泉だ、ア、？ 見ろよ、灰皿の水が凍ってるぞ。布団の襟にも氷がはってるぞ。なあお前、トイレ行ってみたか？ ひどいぞ。横にたれたのが凍ってるんだ。滑って便器に突っ込んだぞ。大の方はもつとひどかったぞ。凍つてとんがつてたぞ。突き刺さるぞ。なあ、K井さん、帰ろうぜ」注

こうして八ヶ岳のディープな夜はジンジンジンと更けていったのであった。

翌年の『ヤマケイ』夏山特集号で、われわれのことが話題に取りあげられていた。

「ウチの山小屋なんて、真冬にゴム長で登つてくる奴もいるんですから」。本当はきっとバカと言つてゐる、編集しただろう。

「オメエがテキトーだからこんなこと書かれたんだぞ。どうするんだ」と、T山部長。

「黙つてしまふからませんよ」と、私。

こんな思い出に、腹の皮をよじらせて笑いあつていたT山さんも亡くなつた。バカげたことを一緒にやつた友が一人また一人と去つていき、彼らと作り上げていた世界が、一つひとつ消えていくようだ。

晩年の母がこんな句を詠んでいた。

【過ぎし日々夢と思ひたくも若葉雨】

そうか、そうだなあ、と思う。

注 現在のA岳鉱泉はベンジョン並みです。

カメラマンになりたい

丹治さゆみ

カメラマン カメラマンになりたいと、そう思つた幼き日の思い。

NHKニュースを幼き弟と觀ていた私は、テレビカメラマンやカメラマンという職業の存在を知つた。なつてみたいと、心動かされた私だったが、そう簡単には実現はしない。

とにかくと、風景写真という物のような眞似事を

して、幼い私はカメラで遊んでいた。そして、小学生のあれば1年か2年生の頃、将来なりたい事、又は、大人になつたら？ というプリントに”カメラマンになりたいです。花や動物を撮つてみたいで

す。”などと記入した事がありました。

結局、その後、私は高校卒業後の進路に、悩み、介護福祉コースの専門学校に進みました。通つていったその専門学校では、新しい友達も、親友までも出来ました。

そうして、私は、カメラマンになりたいという幼い日からの想いを忘れていました。

子供の時は、おじいちゃんが買つてくれたオリンパスの家庭用カメラを私は使いました。

また、お父さんの撮る写真の出来栄えがよく、スケールも大きくダイナミックな写真を見て、私はよく感心をしていました。

「お父さんの写真は上手いな。」

「何故だろう…。」

と、思つたりしましたが、今思うと親という大人としての培つた能力と、〈洞察力、物の見方、小さ

き者を大切にする心など。）とまだまだ人間になりましたの、子供だと、やはり大差がありました。

今現在も私にとつて、写真家、カメラマンは憧れの存在です。そして、写真を撮るという事は、難しく、楽しいんだ。そんな風に、思わされます。

カメラマン、写真家は夢のお仕事で、私にはずっと手が届きません。

しかし、写真美や、映像美を愛する喜び、作品を見、感じる力は、もしかすると、私にもあるのかな？ という気がしています。

夢は夢のまま、なのかもしれません、私はいつか叶う日が必ず来るのだ、と思うのです。私は私の人生、生きて生まれてきて、夢見た者しか掴めないチャンスを、探して、もがいて、その景色とに合うような、駄目な自分を壊していくたいです。

「まだ自分は本当の人生を生きていらない。」「勇気を持つて、チャンスに近付け！」

そう自分自身を、鼓舞している。

まだ、道の途中です。

果たして私は、道なき茨の道を、どんどん張り

切って、勇壯に進めるのでしょうか。

そこに何があるかはわかりません。でも、私は、進もうと、思います。

その先の「夢」に、向かって。

ウクライナを忘れぬ為に

富 安 千鶴子

一九七〇年、約五〇年前に日本で大ヒットしたイタリア映画「ひまわり」カンヌ映画祭パルムドール・アカデミー賞外国語映画賞に輝いた。ひまわり畑のシーンの撮影はウクライナ・キエフ（現キーウ）から五〇〇km南下したところです。当時共産圏ソ連での映画の許可是大変であったと主役のソフィア・ローレンは語っています。五〇年前、ひまわりの群生するシーンに、私は目がくぎづけになつた記憶がありました。その群生するひまわり畑が、現在戦火の中にあると知つた時、私は頭の中の映画のシーンが思い出されて、忘れようとしても忘れる事が出来

ませんでした。
そして、ほんの少し、ウクライナへの思いに寄り添う事にしたのです。

ウクライナの国旗を思わせる青空と黄色の対比が美しく、ひまわりが風にそよぐシーンは、何よりも、七月生まれの私には、太陽の輝やきをもつ力強い意志を感じ魅了され続けています。

かつて、旅で一度ウクライナを通過しただけなのに、千年の歴史をもつ街は、調和のとれた、魅力的で宝石の様な輝やきをもつ、教会群はなんとも美くしかつた。

何としても、地平線まで続くひまわり畑は黄金の路とでも呼びたくなる程である。

今年二月、ロシアがウクライナに侵攻、ブーチン大統領が「ウクライナには主権がない」と、前メドヴェージエフ大統領が「ここ二、三年以内に世界地図から消える可能性がある」と。
ゴルバチョフ前大統領が八月三十一日、九十一歳で死去、「はやく停戦をする事が重要」と声明をだしていた。東西冷戦に寄与し、核軍縮にも米国と協議をしていた人物であつた。

八月二十四日ウクライナ独立記念日である。この時、ウクライナの民間人五千五百人、軍人九千人死去、虐殺、略奪、がれきの街と化していく現実、奪われていく日々の悲劇は語りつくす事が出来ないのである。

プーチン大統領は、原発を「盾」、「要塞」、「兵器」、としている。IAEA、調査団、国際原子力機構の方々の努力も頭が下がる思いだ。

三月初め、私はウクライナ大使館を訪れた。ひまわりの絵と折鶴と湘南鎌倉の鳩サブレーをもつての事だつた。

大使館の方は、大変に喜こばれて、写真をと言われて、一緒に撮っていた。たいた。

曰く「日本人はサムライの國、よろしくお願ひします」と、「折鶴は願いがかなう祈り」と、私は思つた。日本はサムライといえば歴史的なシンボルとして取り扱かれるのだ。大使館の方は、きっと、ウクライナは、コサック。つまり、自由の為に生き抜いてきた誇りある民、喜こび、悲しみをかみしめながら、独立を、眞の國家として出発していたのに、何故だという思いがあるのだろう。戦争の悲惨さを忘れ

ないで、伝える事が大切と思っている。妹と共に、写真展や、映画会や、講演会やウクライナの為に寄り添つている。

伊豆・天城越えの旅

中 岡 裕 志

私は十年前に、伊豆・天城越えの旅をしました。淨蓮の滝への石段をくだると、落差二十五メートル幅七メートルの滝が「ゴーゴー」と音を立てていた。水しぶきで身体中びしょ濡れ、早々と引き返した。天城いのしし村へ行つた。五頭のいのしが、五メートルブルブルを犬かきで競泳するのを初めて見た。赤や青のたすきを首に巻き、水に入つてスタート。フライングするもの、コースから外れぶつかるものが続出した。愉快である。まつすぐ泳いだ赤のいのしが一着でゴールした。見事一着を当てたので賞品の手ぬぐいをもらつた。

バスを降り天城峠へ向かつた。天城峠は、静岡県

東部、伊豆半島中央部にある峠。標高は八百三十メートル。伊豆市と河津町の境にあり、かつては北伊豆と南伊豆をむすぶ交通の要地であり、難所でもあつた。

道がつづら折りになつていて、重なり合つた山々や原生林の中の空気は澄んでいて涼しい。小川が流れわさび田もある。一時間も歩くと、遠くに旧天城トンネルが見えた。

長さ四百メートルほどで、車一台がやつと通れそうな薄暗い旧天城トンネルに入る。

冷たいしづくが「ぼたぼた」と落ちている。トンネルを抜けると明るい南伊豆である。

河津川沿い約二キロメートルに、河津七滝（ななだる）が点在する。釜滝、エビ滝、蛇滝、初景滝、カニ滝、出合滝、大滝の大小七つの滝である。なかでも『踊子と私』のプロンズ像が立つ初景滝は必見である。

なお、滝のことを地元の人は「だる」と呼んでいる。

緑濃い山あいにひときわ目立つ河津七滝ループ橋がある。道路の高低差四十五メートルを解消するために直径二十メートルの二重のらせん状につないで

いる。降りると湯ヶ野温泉である。ここは小説『伊豆の踊子』の作者・川端康成が投宿した福田家で有名である。

『伊豆の踊子』は、昭和時代に六回も映画化されている。ヒロインの踊子（薫）を演じた女優の年齢も添えておきます。

① 昭和八年、

主演・田中絹代（二十四歳）、
大日方傳

② 昭和二十九年、

主演・美空ひばり（十七歳）、石濱朗

③ 昭和三十五年、

主演・鰐淵晴子（十五歳）、津川雅彦

④ 昭和三十八年、

主演・吉永小百合（十八歳）、高橋英樹

⑤ 昭和四十二年、

主演・内藤洋子（十七歳）、黒沢年男（現芸名
は黒沢年雄）

⑥ 昭和四十九年、

主演・山口百恵（十五歳）、三浦友和

河津桜の頃に、また天城越えをしてみたくなりました。

小鳥とおじさん

なかだ いさむ
(えほんだな)

した。

「いないなー。」

そこに、茶色に白の縞模様の洋服の女の子がひとりやつてきました。

「おじさん、ここにちは。」

「やあ、ここにちは。」

その子は、手で木の周りを歩きながら、コンコンコンと叩きはじめました。

「いい音だね。コンコンコン、何だか気分も明るくなるね。いつもこうするの?」

「はい。おじさん、私ね、昨日ここで落とし物したんです。でも見つからないからもう帰ります。」

「落とし物、早く見つかるといいね。」

そのとき、女の子はおじさんの帽子の上に虫を見つけました。

「あつた、あつた。ここに落ちてた。」

女の子はひょいと虫をつまんで、パクッと食べました。

「落とし物は見つかったのかな?」

「ええ。」

「それは良かつたね。」

ある日、おじさんが川辺を歩いていると、茶色と白の縞模様の可愛い小鳥を見つけました。小鳥は、リスのように木の周りをクルクル歩き回りながら、コンコンコンとつついています。おじさんは楽しくて、ちよつぴりふさいでいた気分も明るくなりました。おじさんが見ていると、小鳥は木の中の虫を食べようとして、うつかり落としてしまい、どこかへ飛んでいきました。

おじさんは家に帰つて調べたら、小鳥の名がコゲラだと分かりました。英語の名前はジャパニーズ・ピグミー・ウッドペッカー。スズメくらいの小さなキツツキです。

次の日、おじさんはまたあの川辺に行つてみま

「じゃあ、おじさん、またね。」

「ああ、またね。」

おじさんは、昨日の小鳥に会えたような気がしました。

大好き、韓ドラ

ネコスケ

韓国ドラマが大好きです。最近では「愛の不時着」や「梨泰院（イテウォン）クラス」が話題になりますが、私は「冬のソナタ」の頃からの韓ドラ好きで、ファン歴は二十年近くになります。ドラマのロケ地巡りなど韓国にも三回程旅行に行きました。

韓ドラといえば、出生の秘密、記憶喪失、交通事故といった王道的なものや、生活の為に必死で働く女の子が、財閥の御曹司と運命的な出会いをし、結ばれるというシンデレラストーリーが、有名です。他にも私の好きなホームドラマや時代劇などもあります。

ホームドラマは登場人物が多く人間関係が複雑そうですが、どこかで誰かしらが繋がつていて、人の縁の大切さを感じる事ができます。また、家族愛に溢れる心温まるエピソードも盛りだくさんで、ほっこりした気持ちになります。

時代劇は特に好きです。朝鮮王朝時代のドラマは国王をさまざまな角度から描いた物が多く、作品によつて国王の人格やイメージも大きく変わつて来ます。いろいろなドラマを見比べる楽しさもあります。

女性が主人公の作品も多く、苦難に立ち向かい自ら運命を切り開いて行くというストーリーでは、勇気や感動を貰っています。

そんな韓ドラ好きの私が今、チャレンジしている事があります。それは、四月から始まつたハングル講座の番組とテキストでの学習です。

まずは文字です。ハングルは記号のような文字ですが、子音と母音の組み合わせで、ローマ字に似ています。発音変化やいろいろなルールもあり、文字の読み書きは複雑で戸惑う事ばかりです。

会話は挨拶から始まります。「アンニヨンハセヨ」は「こんにちは」と訳されていますが、本来の

意味は「お元気ですか?」だそうです。ドラマの中でどの時間帯でも使われているのは、その為でした。

「さようなら」は見送る側と見送られる側では違う言い方をします。これは最近見たドラマのシーンで出て来て、その違いを聞き取る事ができました。少しずつですが、学習した会話のフレーズが理解できるようになつてきました。

文法などもあり、まだまだ覚える事はたくさんあります、これからもマイペースで学習を続け、また違ったドラマの楽しみ方をしてみたいです。

晩秋

畠 昌子

文芸ふじさわの五十集にすゞめの話を書いた。あれから六年たつてもまだついて来る。三年が寿命の親雀はとうに亡くなつてゐる筈。

今日は八ヶ岳インターに来た。風が少しあるが秋晴

れのすこぶるよい天気。ピーッと鳴く声に上空を見上げると三羽の雀どち。ピーやん、チビピー。手を上げて呼ぶと、方向転換してうれしい!うれしいと頭上を舞いとぶ近くの人や子供がふり仰ぐ——。もう間違いなく我が家のチビピーだ!。

近ごろ家の近くの畠や林はいつの間にか家が建ち並んでいる。毎年まつ黄に色づく銀杏の木も伐採されてしまつた「落葉がすごいのよ何とかならないから」私は竹箒のサリサリふれる音を止めずに軽く頭を下げる。夏の強い日差しをさけ涼風を呼び、夕べには葉づれの歌声を聞かせてくれた櫻、裸木になるのはもうすぐ——。もう少しガマンしてヨとはらはら舞い散る木の葉達が言ふ。

北朝鮮がミサイル発射、家の中、又窓から離れて下さい——。突然のニュース。かんべんしてヨ!

今日は文化の日、地球を殺す気!見上げる空はどこまでも青し青し——。

逆縁にして弟は逝き俳句の師も身罷り我が人生も終焉の刻、おさな児達よこのふりしきる木の葉、雀どちより教えを乞うてほしい。

昌子

町が新しくなるということ

畠山 知寿子

宿命づけられているのか、数年おきに引越さなくてはいけなくなる。そして引っ越す時に限って、なぜか町で工事が始まる。

私の住んでいた藤沢本町も、前年から少しづつ工事が始まつた。湘南を感じる小田急の踏切。たまに待つけど不便さは感じない。毎月お参りにいくので、白旗神社へ続く道を何度も通つた。その間に、少し古いけれども手入れが行き届いて、愛情を感じる家が見えるのが好きだつた。私には安住の地もないから、何となく通り過ぎる風景すべてが暖かかった。

昨年、駅前の一軒の家が取り壊された。

持ち主が育てていたのだろうか。家屋がなくなつても、しばらく庭には季節の綺麗な花が咲いていた。五月は美しい菖蒲の花が咲き、夏草が生えた。その後、草花が刈り込まれた。それは少し悲しかつた

が、またすぐに自然の野花が咲いていた。

暑い夏を二度超えた後、急に工事が堰を切つたようになつた。今年の秋に重機が入つた。あつとう問——全てが無に帰る。機械の無慈悲な作業に、草木の根が全て掘り返されていく。二度とここに花が咲かないように、全ての命が抹殺される。

工事作業の人に罪はないし、これから藤沢駅が高架になるのもニュースで聞いている。この町もきっと変わるのだ。

——でも、私は泣いていた。

ふかふかの柔らかそうな草の生えた土が、無機質なアスファルトになつてしまつ。暖かかつた庭の色が、もうそこにはない。

近所にあつた空き地にも、シロツメクサが咲いて野鳥が休息する空き地があつた。ここも全て、コンクリートで埋め尽くされて、駐輪場に変わつてしまつた。

この工事が始まつた頃、予定では先だつた引っ越しを急に決めた。本当は町を離れたくなかつたが、この風景を見るのが辛くて決断できたのかもしれない。

町を出る前の日に、掘り起こされた土の山を見ていた。ちょうど隅っこに、小さな白い花だけが残されて咲いていた。工事の人が忍びなくて、残したのかも知れなかつた。最後の姿は凛として、伊勢山を前に映えていた。

あと何年かすると、この古き良き藤沢本町の駅は、さらに便利で新しいものに変わるのだろう。住む人も少し、変わらのだろう。

駅前に咲いていた花は消えた。野原も消えた。私もいなくなる。

——それが新しくなるということ。

生命の残した痕跡を、私は見ていた。

そもそもウチは、保護を求めて来たから、助けてやるという方針で20数年、猫を飼つて来た。ウチの庭に出入りしても良し、宿借りしてもかまわぬ、といふことだ。隣のアパート住まいの方が、大変な猫好きで、部屋に上げたことが大家にバレて追い出しがくらつた。庭に粗相をされてもウチは騒がないので4匹の世話を頼まれた。芝生を自慢するような庭でないから、肥料になるとむしろ受止めた。

その頃、近隣に野良が多かつた。人間様の都合を当てはめて悪いが、エサはあげる、その見返りに避妊の処置はガマンしてもらう。

もう一つ。原則、病気以外は決して部屋には上げない。躊躇まで手を回すつもりはない。不思議なことに、ルールを決めると、誰一匹家に入ろうとはしないのだ。好奇心から覗き込んで玄関に閉じ込められでもすると、かえつて猫はパニックを起こした。

「ウーちゃん」

林田繁雄

初めに頼まれた猫の一匹、プチ君は、（プチで見事な毛並みとは云えなかつたから）19年、共に暮らしてくれた。帰宅すれば、いち早く、庭先で迎えてくれ、資源ゴミの日にはゴミ置場まで、夜道を先導してくれた。声を掛けていれば、何処までも散歩に付いて来た。

ウーチャンも、車の下のエサに気付いて流れ着いた猫だつた。他の猫のエサを横取りし独り占めして、さらにもつとよこせと一晩中鳴いた。否、唸つた。だからウーチャン。食べている時以外は、24時間、唸つた。ガリガリに痩せ、身丈が異様に長い縞猫。一歳にもなつていないと思われたが、ウチの猫はすぐに戻尾を卷いた。

近隣に迷惑だから、私は根負けしてエサをやつた。エサをやろうと近付けば、眼を三角にし鼻じわを寄せ、牙を剥いてうなる。その恐ろしいこと。車の下はオレ様の領地だとばかりに居座ること2ヶ月。

こちらも意地だ。飼育歴20数年の経験を懸けて近付こうとした。食らい付いている間に然りげなく尾を撫でる。おつと危ない引っ搔かれるぞ。睨み付ける眼のすごいこと。

何度、捨てようと思つたことか。
「こいつは懐つきやしないよ、捨てられたつてしまふがない」

「なんだ、お前も猫を捨てる奴だつたのか」頭の中を行つたり来たりの繰返し。

それが、気が付けば、庭で私が日光浴をすれば、腹の上に飛び乗つて憩うような迷惑な行為をするまでになつたのだ。

ウーチャン。

僕が戻尾を引っ張ろうが、ヒゲを弄^むろうが、けつこう、怒らない猫になつた。あの三角眼、鼻じわは何処へ行つたのか。

今や、学校帰りの子供達の人気ものになつた。その雄姿は、どんなに大きな犬が通り掛かろうと、ビクともしない。

至福の三年半だつた。

そして、去る3月30日以来、ウーチャンが帰つて来ない。

孫娘の結婚披露宴

堀井 寛

娘の喜びに満ちた姿を見て、自分も幸せな気持になつた。
外に出ると天氣予報の雨模様と違つて、陽光がまぶしい小春日和であつた。

木蓮の香り漂う四月中旬に孫娘の結婚披露宴が都内の白金にある八芳園で催された。

アメリカのバイデン大統領が来日して宿泊して岸田首相が晩餐を共にしたことがNHKで放映され広く知られことになつたが、四方八方から眺めて美しいことから命名された園内に歩を踏み入れると一万二千坪の広大な庭園が拡がり樹令数百年の樹々が生い茂り、池には緋鯉がゆつたりと泳ぎ廻り都心とは思えぬ閑静さである。

披露宴の会場では大型スクリーンで新郎は幼少より高等学校卒業までフランスに在住、新婦は高校はイスイス大学はカナダで、丸の内の商社に入社しアメリカ担当の部署で出合つたことなどが紹介された。思い出の出張先が新郎はケニア新婦はルワンダなのもうなづける。

お色直しで入場した新婦の着物姿は優雅で美しかつた。新郎は弟さんを呼び出し感謝の辞を述べ、新婦は姉を呼び出し感謝の手紙を読み上げたシーンは印象深かった。

仙台からの祝電は名文ぶんであつた。

もてなしの料理は八芳園の粹な計うかがいが伺えた。

—前菜—

旬の虹鱒まきのタルタル・ミモザ風

ホワイトアスパラガスと新郎新婦が収穫した春の野菜

チャペルでの挙式はバイオリンとフルートの生演奏に合わせて、純白のウェディングドレスを素敵にまとつた孫娘を父である長男が晴れやかな面もちでエスコートし新郎にバトンタッチ。

宣教師が英語と日本語で婚姻の言葉を読みあげ、互に指環を相手の薬指にはめて宣誓をした際の孫

—ステップ—
新緑のクレソンステップ

—魚料理—

春・海のかおり

—肉料理—

新郎ゆかり(縁)の地フランスのサルティンボッカ

—食事—

(春爛漫)桜鯛のリゾット風鰹出汁餡掛け

—デザート—

新婦ゆかり(縁)の地スイスのグリエールチーズの

タルトフロマージュ

—コーヒー&ウエディングケーキ—

お腹も満足、披露宴も滞りなく、めでたく終了し、
幸せな気分で妻と娘と共に足取りも軽やかに家路
についた。

行きつけの美容院でカットしてもらいながら映画の話になつた。私が若い頃、五〇年ほど前は、立ち見は当たり前。今のように予約の世の中とは違い、上映中の入場は当然あつた等々の話だ。

その話の中で、座席の間の通路が階段になつてゐる所へ座つて、ダステイン・ホフマンの『卒業』を見たのを思い出した。五〇数年前のことだ。元彼役のダステイン・ホフマンが、花嫁をサーカスもどきの技で結婚式場からさらり、手をつないで走り去る場面は、当時話題になつた。その格好良い姿を是非見ようと、友人たちと混んでいるだろう映画館へ出かけたのだ。

美容師と同じ年代の長女に『卒業』を知つているかとたずねてみた。
「その映画を見たことはないけれど、『レインマン』は知つていて。トム・クルーズが共演だったよね」

映画も歌も好きです

松本実知子

と、即座に返事が返ってきた。

「同じ頃だと思うの。吉田拓郎の『結婚しようよ』が流行ったのは。教会の結婚式で花婿が白のジャケットを着るようになつたわ」

と、昔話を続けてしまった。

それを受けた長女が、

「その頃、世の中が変わり始めたのね」

と、珍しく話に乗ってきた。

日本が高度成長期に向かい、それまでの風習も変化し始め、結婚観も変わってきたのだろうと何と無く納得。

話はそれるが、最近懐メロ番組をテレビで見る機会が多い。それも私好みのJポップスやフォークソングである。先週見た番組ではバーに南こうせつ、さだまさし、中村雅俊らが次々訪れ昔話を始めるという設定だった。その話題から、彼らのヒット曲や、同じ頃活動した仲間の歌が流されるという趣向だ。

観ているうちに懐かしさがこみ上げ、画面に見入ってしまった。村下孝蔵は四〇代で早世している。彼の生出演で『初恋』を聞きたかったのに残念

だ。最後の方で私にとつての本命、吉田拓郎の『落陽』が登場。大満足で終わった。

おや、『エルヴィス』の映画の広告だ。あのロッカーワークのエルヴィスだよね。彼の映画を見るのは何年ぶりだろう。彼を演じる俳優は知らない名前の人だが歌手だろうか。

六〇年ほど前だろうか。彼の歌をラジオで聞いた覚えはある。しかし、題名は忘れてしまったが、映画の中でギターを弾きながら激しく歌っている姿の方が印象に残っている。『監獄ロック』だろうか。『ブルーハワイ』では、きらきら光る白の衣装でゆつたりと歌う彼は、いかにもスター然としていた。そういうえば、彼も四〇代で亡くなっている。早死にだ。

藤沢でも七月に上映する。観に行こう。どのよう

なエルヴィスに会えるか、楽しみだ。

蔵書について

松与常清

蔵書についてと云える程私は本を持っていない。

老人ホームの居室に丈一メートルに及ぶか及ばない三段ある桑の木材の書棚に約百冊を収め、引き出し四段付きのライティングデスクの引き出しに満杯の書冊がある程度である。

が、私はかつて蔵書家であった。老人ホームに入る時、三、四千冊はあつた本の大半をかつての居住地の図書館に預いてもらつた。

読書家とは言えない。只集めるだけの収集家であつた。それでも蔵書を見ていると豊かな気持になるのだから不思議であつた。書棚以外にも所狭しと床にも積み上げてある蔵書であつた。そしてそれらの本によつて部屋が少し黴臭くなつていたのである。古本屋の如くともいおうか。

五十年ばかりかかつて収集した本であつた。全集といえば何作家も持つていた。毎月の配本にて

買つたものが大半である。糖尿病で三十才から酒を断ち、煙草は知らないうちに肺結核になつて知らないうちに治癒したきらいがあると、レントゲン写真に写つた肺の白い影の部分を医師に見せられ、ドクターストップがかかり止めた。されど酒、煙草をやつていたら本の収集は出来なかつたはずである。嗜好品に使つていた金錢を収集に費した訳である。

道楽といえば小さな道楽であるのだがそれも断つたのは七年間の入院生活である。入院していた時十冊まではしか持ち込みを許されなかつたのである。その間ほとんどの本を買わないのであるから、蔵書を持つた虚しさを思い知らされたのである。だから老人ホームに入る時、本を図書館に預いてもらう時も抵抗はなかつたのである。そして図書館で眞の本好きの人達によつて持つていた本が生きるのではないかとも自己合理化できたのである。

只し、老人ホームに図書館がある事を知る前に図書館に預いてもらつたので、もつと早くからわかつていればとは思つた。何作家もあつた全集本を持ち込んでいれば悔しい思いをしたものだ。しか

し、それは後の祭で致し方のないものだ。

絞りに絞つて今、老人ホームの書棚と引き出しに
ある本と死ぬまでつきあっていくのだ。

儘 田 加寿子

少ない蔵書ながら、老人ホームの居室に居所を得て
いる本達。その中で殊に愛している蔵書がある。それは三巻本の謡曲集である。これはくり返
しくり返し読んでいる。一日一作づつ注釈、解説、
詞章と読んでいる。一日、三、四十分費している
だろうか。以前は歌舞伎もまた好きで歌舞伎全集も
持つていたのだが、謡曲の方が象徴性があり簡潔と
いうこともあり今は謡曲集を読んでいるのである。

蔵書の中で謡曲集が一番縁があつた訳である。

蔵書の中での永遠の女性とでも云えようか。棺桶
けに入れる本を選ぶとしたらこの二冊の謡曲集にし
ようかとも思つてゐる。

小雨の降る冬の寒い朝、私の住む団地のゴミ集
積場に捨てられていた、懐しいレコード盤があり
ました。

誰のが捨てたのでしょうか。

破れかかった紙袋の中には、30枚ほどのレコードが
入っていました。

レコードは大切に保管されていたらしく、傷もあ
ません。

夫に話して、りっぱなレコードがゴミとして捨てら
れている。あのまま、壊れて捨て去られては、かわ
いそう。夫の了解を得て、そのレコードを我家で引
き取りました。

しかし、我家もすでに、レコードプレーヤーはあり
ません。レコードは、部屋の片すみでねむつていま
した。

ある日、息子から私に、レコードプレーヤーのプレ

よみがえつたレコード

ゼントがありました。

病みあがりの私には、とてもうれしいプレゼントになりました。早速、レコードを聴いています。特に「乙女の祈り」が好きです。

八十路を生きる楽しみ

森 真彦

ある新聞によると、二〇二一年における日本人の平均寿命は女性が八七・四歳、男性が八一・四歳となっている。国別順位を見ると、女性は世界第一位で、男性は三位であつた。世界的にみても日本は高齢化社会になつてゐる。私もお陰で喜寿を過ぎ、八十路に至つてることをありがたく思つてゐる。今は、健康に留意しつつ少しでも社会のお役に立てる存在でありたいと願つてゐる。そして健康とは、体も頭も心もみな揃つて健康であることをいうのであろうと思つてゐる。

寝つきりになつたりしないように、体の健康を保つには、例えばNHKの「ラジオ体操」や「みんなの体操」など、体調に合つた軽めの運動を毎日のよう続けることが大切ではないかと思われる。また認知症にならないようには、いわゆる脳トレなど頭の体操が役に立ちそうである。例えば、毎年発刊されている「文芸ふじさわ」には、俳句、川柳、短歌や隨筆などを応募でくる。自分の作品が活字になつて残るのは楽しいものだ。また「藤沢市生涯学習人材バンク」に登録しておくことも役に立ちそうである。私は「マジックやパズルで楽しむ算数・数学講座」というタイトルで登録している。講座を登録しておけば、日頃からよりよい講座にするべく努力することになり、これが頭の刺激になる。

高齢者が体の老化や病気の心配、また死ぬことへの恐怖に打ち勝つて安らかに天寿を全うするには、日頃の心の持ち方というか、信念が大事になつてくるようと思われる。深く考えてみれば人が生きているということは不思議なことである。人間の体はうまくできており、心臓が常に動いているのも胃腸が

全うしたいものと思つてゐる。

以上

働いてくれるのも、みな自分の頭が命じて働くでいるのではなく、自分の知らぬ間にまったく自動的に行われているのである。

大自然から生き物が生まれて以来、人間も長い年月の間に進化してきた。そして先祖から両親に続く縁によって自分が生まれて今日に至っているということは、神仏というか、大自然の恩恵である。そういう目で見ると、何もかもありがたいと思えてくる。そして遠からず、また大自然の一部に帰り、次の大自然の創造に参加することになる。長く深い目で生命を見ると、今ここに生きていることが不思議でありがたいことと思えてくる。

高齢になつてくると、体の病気は心も弱らせ、心の不調は体にも影響してくる。したがつて趣味でもボランティアでも好きなこと、生きがいになるような活動を継続して心を充実させることができるのは健康にもつながるように思われる。長生きをするのに、よくないことは退屈をすること、くよくよすること、つまらない緊張や心配をすることなどといわれている。したがつて、いろんなことに前向きに取り組み、健康寿命を伸ばしつつ生命を

「ゾウの時間、ネズミの時間」と私の時間

山 下 一 馬

円覚寺の講座で本川達雄先生の「ゾウの時間、ネズミの時間」の講演を聞いた。生物学的時間では、ゾウもネズミも心臓は15億回打つて止まる。それぞれ心臓が鼓動する時間、異なる心周期によつて寿命が決まるそうだ。動物の時間は体長に比例し、ゾウはゆつくりと行動し、心周期もゆつたりしている。

一方ネズミは早く動く、鼓動が早い分寿命が比較的短くなる。これが「ゾウの時間、ネズミの時間」なのだそうだ。我々の時間はどうだらう？ 朝日が昇り夜に日が沈み翌日の日の出までの時間、古代エジプト時代にこれを日時計で昼と夜をそれぞれ12分割して、1日が24時間とされた。我々はこの時間に

従つて毎日生活している。起床して朝食をとり、会社で働き、帰宅して夕食、すこし寬いで、就寝するといつた一日を過ごしている。最近の若者は、「タイパ」（タイム・パフォーマンス）を重んじる。学生は授業を90分間聞くのではなく、授業の録画を1.5倍速、60分で見る。社会人はドラマや映画のビデオを1.5倍速で鑑賞し短時間で沢山見る。世の中どんどん“せせこましく”なつてているようと思う。電車に乗つていると、ほとんどの人はスマホを見ている。中には歩きながらスマホを見ている。毎日が情報と時間に振り回され、いつたい「自分の時間」つて何だらうと考へてしまふ。またお年寄りは「年を取ると一日が早くなり、残り少ない人生、時間がどんどん過ぎて往く」と嘆いている。これは感じる時間の速さで、年を取ると動作が遅くなり、同じことをやつしていくても年と共に早く時間が過ぎて往くと感じる。若者は生きて行く時間が長く、お年寄りは残された時間が短いことからも感じられる。一方仏教の時間は、「諸行無常」であり、一切の時間は一瞬に過ぎ去る。今がすべてであり、その「今」は永遠なる時間に通じると言われている。つまり「今」をい

かに充実して生きて行くかだと思う。「タイパ」で効率よく時間を過ごしても、それだけだと、毎日忙しく過ごしているだけで、窮屈であり、何を樂しみに生きているのだろうか？その分どこかで「ゆとり」を持つて何かを楽しむことが大事ではないだろうか？一日をメリハリつけて過ごすことが「Value for Life」（充実した人生）に繋がる。私の時間はゾウの時間でもネズミの時間でもなく、仕事をする時は効率よく短時間で多くの処理をする。そして自分の余暇を楽しむときは、「無駄な時間」と思われるような「ゆつたりとした時間」を過ごすこと。音楽やドラマを「タイパ」で沢山鑑賞するのでは、そんなに一日を詰め込んでも疲れるだけで何を楽しんだか分からぬ。たまには帰宅中、夜空の星を眺めて観るように、ゆとりをもつて、贅沢に時間を使い、充実した時間を味わつても良いのではないか？時間に振り回されるのではなく、情報過多の中で埋もれるのではなく、自分の時間をしっかりと持つて毎日を過ごしたいものだ。今宵も私は美味しい酒の肴と美酒で秋の一時を過ごしたいものだ。李白の詩「将進酒」のように

ゆるやかな日々に

山田節子

二〇二〇年、江の島神社で引いた初みくじは、「一番大吉」という稀なるものだった。

赤色のおみくじを手渡してくれた時の巫女さんの笑顔も眩しく、幸先よしと初風の渚を清々しい気持で家路についたものの、コロナ禍は長びき、度重なる変異株の出現は、問題を抱えたまま秋を迎えている。

これ迄私たち人間には、伝染病の猛威や戦争などを克服しただけでなく、その都度更なる発展の

切つ掛けにして力強く現代に繋いできた歴史があ

る。そのような歴史を達観してすごすことができるが、今回は、矢継ぎ早に押しよせてくる情報に、私たちの心が搔き乱されてしまつていて思われる。「高齢者は人出をさけて穏やかにすごすよう努めるように」という忠告に、私は日常の暮らしに焦点をおく毎日にきりかえてみた。

コロナ拡大を避けて、長らく中止が続いた公民館祭りが三年振りに開催されたことは、地域の活気をとり戻す大きな力になつた。恒例の古本市のための協力は、私の書物整理にもエンジンをかけることになつたのだ。今一度目を通してから別れようと積み上げたものを、片つ端から開き、再会を喜ぶような作業は、公民館に届けるという目標も手助つて、私に暑さも時間も忘れさせ、遠出がままならない不満を、楽しい時間に変えてしまった。

古本市に集まつた本は一万冊を超えるほどだつたとか。天候にも恵まれて、公民館のサークル活動で生まれたつながりはお祭りの形で予想以上の思い出を作つてくれたのである。

古来人生を四期に分けて、各期の生き方を律する考えは夫々興味深いものだ。学生期^{がくせい}家住期、そして視野を広げて自他を磨く林住期、私は今その後半にある。人生で一番充実した時を通してゆるやかな遊行期を目ざす……という考えに思い巡らしていたところ、この春大学生になつた孫娘が「おばあちゃんまとお話をしたいから」と、帰省中の大事な時間をさいて来てくれた。もう昔のようなお相手をするの

ではない、対等の話相手となつた孫との、名づけて未年同志女子会となつたのである。ゆつたりと話題も広がつていつたが、おしゃべりの中にも確かに成長を感じることが出来た。彼女はきつといつも天国から見守つておられる祖父母のことについてを馳せ、尊い生命の鎖でつながつてゐる自分の存在を心に留めたにちがいない。私はこのような幸せな時間を授かつた喜びに、先人たちの笑みを思い浮べていた。

体力的に下降線を巡るのは自然の成行き、素直にうけとめて、無理をしないで、楽しくこれまで続けてきた習慣を守りながらゆつたり歩をすすめていきたいものである。

「国際事業委員会」というのは、Y M C Aが取り組んでいる、あるいは今後取り組むべき国際関係の事業について意見交換を行うため、二ヶ月に一回程度、平日の午後七時から一時間程度行う会議のことだという。

当時、私は神奈川県庁の「国際課」というセクションに所属していて、殆ど毎日、残業をしていた。しかし二ヶ月に一回程度、それも、十九時から行われる会議に出席するというくらいのことなら、特段の

になる。キッカケは、国連が「国際児童年」と定めた一九七九年に、神奈川県・横浜市・横浜Y M C Aの三者が共催して「子どもの未来を考える国際シンポジウム」という事業を行なつた事である。

私のY M C A活動

山 成 健 治

私がY M C A（正確には「横浜Y M C A」）の活動に携わるようになつてから、早いもので四十年以上

問題はないだろうと思つた。またY.M.C.Aの委員会には、多彩なキャリアを持った方が参加していると聞いていたので、そういう方々と意見交換をするチャンスが出来れば、貴重な考え方を学ばせてもらうことが出来るのではないかと考え、「国際事業委員」をお引き受けすることにした。

笑顔の100歳時代

横田 佳代子

「横浜Y」の「国際事業委員」になつて強く感じたことは、事業を行うことによつて「何を学び、何をすべきか」という事業展開の方向が、「横浜Y」と県庁とでは、大きく異なつていたということである。というのは、同じ国際関係の事業を行うにしても、私が居た頃の県庁では「先進国の事例を検討し、我々はそこから何を学ぶべきか」を考えることが多かつた。一方、「横浜Y」では、「途上国の実態を踏まえて、我々は途上国と如何にして共存すべきか」ということが議論の中心になる事が多かつたのではないかと思う。

2011年、ボストンのジョン・万次郎記念館を訪れた。日本人の館長夫人が、「一週間前、日野原重明先生が、ここで100歳のお誕生祝をされたのですよ。その、椅子にお座りになつて」とにこやかに椅子を指して言われた。その時、日野原先生との不思議なご縁を感じました。

昭和32年から、財団法人日本国際医学協会に8年勤務しました。毎月、医学部の教授、製薬会社の社長、開業医が、200人ほど集まり、「治療談話会」を開催。日野原先生は、必ず出席され、8年間、毎月お会いしていました。理事長の石橋長英先生は、若き日の日野原先生を高く評価され、信頼され、パネラーを、何度もお願いしていました。石橋先生は

道の追求」を目指していきたいと思っている今日この頃である。

「食」を重んじられ、東京農業大学に、栄養科学科を創設されました。自然食品、蜂蜜や、海草を薦め、「葉はなるべく飲まないほうが良い。いざというときに効かなくなる」と言われました。「温故知新」を尊ばれ、人間関係を大切にされ、若い人を育て、慈悲深い先生でした。80歳で、獨協医科大学の初代学長に就任。97歳まで元気に活躍されました。

日野原先生は、食、運動、社会参加の重要性を訴え「良い生活習慣」を広められました。社会に貢献する、「新老人の会」を創設しました。

ミュージカル「葉っぱのフレディ」を、日野原先生が企画、黒岩裕治知事が、プロデューサー、宝田明さんが主演で、ニューヨークのブロードウェイでも公演しました。

2012年、日野原先生の100歳の記念講演会が、藤沢の市民会館で開催され1,000人が参加。その内、100人が私の友人でした。103歳の記念講演会も、藤沢の市民会館で、開催された。「会いたい」というお電話を頂きました。先生は石橋長英先生のことを、尊敬の念を込めて、長いこと話された。その記憶力の確かさに驚きました。「母も

100歳で、元気です」と母の描いた絵をお見せすると「おかあさんは明るい方ですね」と、言われ、後に母を名誉会員に推薦して下さいました。2020年、産経新聞の朝の詩に、私の「ほほえみ」が掲載されました。

「母は茶寿（百八歳）いつも ありがとうございます」と手を合わせ にこにこしている お世話になつて いるセンター長が、『長いことこの仕事をしてきたけれど お母さんのような人は 初めて お母さんと過ごす時間は 私にとつて宝物』と微笑んでくださった」

2018年、日野原重明記念かながわの会が発足。100歳に間近の遊行寺の他阿^た真円^{ましゆん}上人^{じょうじん}が、素晴らしい記念講演をされた。一番前の席で、鈴木恒夫市長が、熱心に聴いておられました。2022年10月22日、91歳を迎える大村嵐師匠が、記念講演をされた。145名の出席者の前で、元気はつらつ、お元気な大村嵐師匠の、全力を挙げての真心の講演に会場一杯、明るい、笑顔があふれ、命あふれる100歳時代の到来を実感しました。